

子どもの感受性を育むアートの教育に関する研究
——レッジョ・エミリア・アプローチを手がかりにして——

学校教育学専攻
教育コミュニケーションコース

学籍番号:M08018J

氏名:善積 亜希子

I. 問題の所在

本研究の目的は、イタリアのレッジョ・エミリア・アプローチを手がかりにして、子どもの感受性を育むアートの教育の可能性を示すことにある。

子どもの感受性に関する先行研究で多くみられるのは次の二つである。一つは、例えば石崎ら(1997)の研究にみられる美術における学習と訓練によって生み出された表現作品と、芸術作品への反応・解釈・判断といった鑑賞的な過程についての分析から為る、美的感受性についての考察である。こうした、鑑賞や制作に関する技能の分析によって為される美的感受性についての考察は、美的感受性の「生得的」あるいは「環境や文化による習得的」な発達要因の特性を明らかにする等、美術教育の基礎的研究として(石崎他,1997)大いに意義がある。もう一つは、例えば葛西ら(2006)の研究にみられる感受性と共感性を増進し、他者への共感と内的理解を目指して行われる感受性訓練についての考察である。感受性訓練は心理療法の一つとして、現代の希薄な人間関係の中、感情の扱いに不慣れで他者に共感できない子どもが感情を調整する手段を身につけるための有効な手法(葛西他,2006)とされている。

しかし、本研究で課題とする子どもの感受性の在り方は、石崎らのいう美的感受性や、葛西らのいう感情を調整する能力だけに止まるものではない。本研究では、第一に、感受性を美術教育における評価や共感経験尺度といった一定の基準、また他者との比較によって測定されたり、数値で表現されるも

のとしてではなく、個々の子どもが他者との豊かな情感の共有によって顕在化させていく潜在能力(中田,2008)として捉える。第二に、感受性を訓練によって強制的に育めるものではなく、多数の他者が共存する地域社会や学校における生活でこそ育めるものとして捉える。

また、レッジョ・エミリア・アプローチについての先行研究は、尾崎ら(2001)の子どもに対する情報量の多寡や教師の声かけの変化等によって、子どもの作品にどのような違いが表れるかといった比較実験等がみられる。こうした実験は、子どもの作品を美術教育の目的とみるならば、作品制作の過程で子どもが何に問題を感じているのかに教師が気づくという点で、大いに意義がある。しかし、レッジョ・エミリア・アプローチの本質は、設定保育の枠組みの中で、教師の言葉や働きかけによって、子どもの表現力にどれだけの違いが出たかを見出し、それを既存の描画指導方法と比較して語ろうとするような実験からはみえてこないはずのものである。なぜなら、レッジョ・エミリア・アプローチのアート教育にみられる、子どもの作品を子ども・教師・保護者による対話の道具として捉える発想は多様な他者や自己と「出会い対話する創造的行為の技法」(佐藤,2003)としてアートを捉えることによって、はじめて可能になるからである。

本研究ではアートと子どもの感受性を先のように定義した上で、子どもたちの感受性の育みが困難なわが国の現状と、レッジョ・エミリア・アプローチの下で育まれる子どもたちの感受性について明らかにする。そして、既存の教育と学校に対する発想を転換

し、わが国の地域社会や学校に感受性を育む場を回復する可能性について探っていく。

II. 論文構成

序章

第一章 感受性を育む必要性と課題

第二章 レッジョ・エミリア・アプローチの成立過程

第三章 レッジョ・エミリア・アプローチにおけるアートの実践と子どもの感受性

終章 子どもの感受性を育むアートの教育の可能性

III. 論文概要

第一章では、子どもの感受性を困難にしているわが国の現状を、主に、規範的な到達点を目指してなされる狭隘化された人間形成概念(モレンハウアー, 2001)と、多様な価値の存在を前提としない学校化された地域社会の問題(矢野, 1998)を通して明らかにする。

第二章では、レッジョ・エミリア・アプローチの理念が、どのような歴史や文化の中で生まれ、世界的な注目を集めるに至ったかを明らかにする。

第三章では、レッジョ・エミリアにおけるアートの教育によって、子どものどのような感受性の育みが可能となるのかについて、〈十分な遊戯体験〉と〈聴くことの教育学の実現〉という観点から明らかにする。レッジョ・エミリアの子どもたちは、第一に、十分な遊びを通じて、ファンタジーの世界を創造すること、第二に、グループ活動の中で、多様な象徴的言語を介しての対話や、「一種の倫理」を伴う交渉を通して、仲間との連帯の精神を育むこと、第三に、「関わりのシステム」の中で、大勢の家族や地域住民との連帯の精神を育むこと、そして第四に、「聴く技法(アート)」を持つ大人に自分の考えを正しく理解されることを通じて、多様で豊かな感受性を、相乗的に育んでいく。また、マラグッツィ(2001)が、レッジョ・エミリアの幼児学校では、子ども・教師・家族の全てを中心とし

た学校運営が行われていると述べているように、アートの教育を手がかりにして、子どもの感受性の育みについて考えることは、子どもに関わる大人たちの感受性の育みについて考えることでもある。

終章では、わが国の教育や社会の在り方に、レッジョ・エミリアのアート教育が示唆するものは何であるのかを明らかにする。秋田は、今の我々に問われているのは、「アートする主体が連帯し合い、身体化された活動の根底となる共通感覚を基盤にすえた」アート教育の実践を如何に理解し、その実践の前提になる教育学を「自らの手で解体し再構築することで日本のアート教育をどのように創造できるのか」にあるとしている。しかし、国や地域の特性を活かした独自のアート教育を創造することは、決して容易ではないはずである。それは、まさに既存の学校や地域社会への挑戦であり、今、我々に求められているのは、そうした挑戦の出発点に立つことなのである。

IV. 結語

レッジョ・エミリアの幼児学校におけるアートの教育をもとに、子どもの感受性の育みを考察することで、わが国の学校や地域社会の現状を認識し、学校と地域社会の再生や、子どもに関わる大人の感受性の育みについても明らかにできたことは、本研究の大きな成果である。今後は、本研究では深く取り上げられなかった、教師や保護者の心地よさという観点からも、レッジョ・エミリア・アプローチについて明らかにすることが、論者の課題である。

〔参考文献〕

- ・エドワーズ, C. 他編(佐藤学他訳)『子どもたちの100の言葉』世織書房, 2001年
- ・佐藤学他編『子どもたちの想像力を育む』東京大学出版会, 2003年
- ・中田基昭『感受性を育む』東京大学出版会, 2008年

主任指導教員: 杉尾 宏

指導教員: 大関 達也